「いき」の構造のアポーハ論的構造

上田　昇

1．序

周知のように九鬼周造は『「いき」の構造』において，「意気」等の「趣味」を頂点に配置する直六面体（四角柱）を描いている[1)]（図1）．この図に関連して九鬼は次のように述べている．「すべての頂点は互いに対立関係に立つことができる．上面と底面において，正方形の対角線によって対立する頂点はそのうちで対立性の最も顕著なものである」(p.44．下線は引用者)．従って，「意気」は「渋味」や「甘味」に対してよりも「野暮」に対して一層鋭い対立性を示すことになる．「意気」と「野暮」は有価値的であるか反価値的であるかという点で対立し，「意気」と「渋味」（および「意気」と「甘味」）は対自的であるか対他的であるかという点で対立する．ここで，有価値的であるか反価値的であるかの対立が，対自的であるか対他的であるかの対立より鋭い対立となる理由は定かでないが，少なくとも，九鬼は「最も顕著な」対立を否定性として捉えていたと思われる．例えば，「野暮は同義語として，否定的に言表された不意気と不粋とを有する」(p.39)，「渋味は異性的特殊性を公共圏として甘みの否定によって生じたものである」(p.41) などと語る．

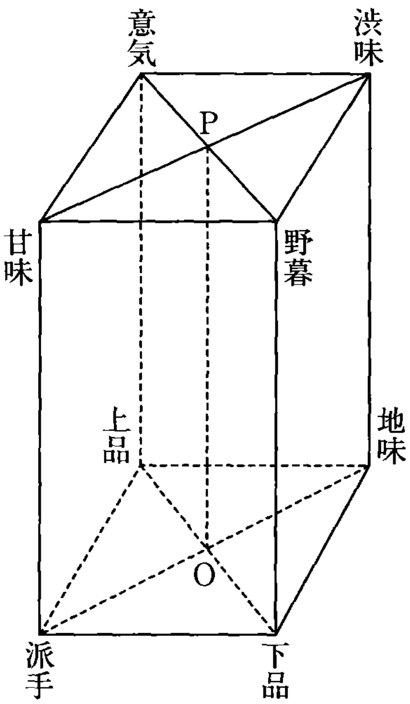


図1

我々はこの対立性ないし否定性をどのように表せるであろうか．各頂点を各語の指示対象と見るだけでは意気と野暮の対立が意気と渋味のそれより「顕著」であるとは言えない．我々はこの対立性・否定性をアポーハ論的な否定によって表してみたい．また，そのことを通じてアポーハ論的否定の特徴を考察する．

2．アポーハ論的語の意味

まず，「語の意味は他の排除である」とするディグナーガのアポーハ論における「語の意味」を以下のような語群表を用いて形式化する．この形式化が文献解釈としてどこまで妥当性をもっているかは別個の問題として，今は扱わない[2)]．

説明のための例として，いま語群 {A, B, C, D, E} を考え，それぞれの語の適用の当否が次の表のようであるとする．

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
A	○	○	×	×	○	×	×
B	○	×	○	×	×	×	○
C	×	×	△	○	○	×	○
D	×	×	×	○	○	○	△
E	○	○	×	×	×	△	×

表 1

表１でＡ乃至Ｅは語を表し，イ乃至トは語の適用の当否が問題となるものごと一対象あるいは状況一（のタイプ）を表す．○は当該の語が当該のものごとについて／於いて，言語慣習上適用可であることを，×は同様に適用不可であることを，そして△はどちらとも決めがたいことを意味する．

表１に沿って，語の意味を次のように定義する．まず，語Ａについて×が該当するのはハ，ニ，ヘ，トである．これを語Ａの排除対象と呼ぶ．次に，語Ａの排除対象に含まれる要素のいずれかについて（於いて）適用されることが適正な語，すなわち○が該当する語を列挙する．{ハ，ニ，ヘ，ト} のいずれかにおいて○である語はＢとＣとＤである．このようにして，語Ａについて集合 {B, C, D} を得る．同様の手順で，Ｂについては {A, C, D, E}，Ｃについては {A, B, D, E}，Ｄについては {A, B, E}，そしてＥについては {A, B, C, D} を得る．

語Ａ乃至Ｅについて得られる集合 {B, C, D} 乃至 {A, B, C, D} を，それぞれに対応する語の排除対象の被覆（covering）と呼んで一以下では簡略に語の covering とも呼ぶ一，これを以て語のアポーハ論的意味と定義する．つまり，語Ａのアポーハ論的意味は {B, C, D}，語Ｂは {A, C, D, E}，語Ｃは {A, B, D, E}，語Ｄは {A, B, E}，語Ｅは {A, B, C, D} となる．

ここで，語Ｃの排除対象の被覆 {A, B, D, E} は語Ｄのそれ {A, B, E} を含んでいるが，このような場合，語Ｃは語Ｄの下位語（従って，語Ｄは語Ａの上位語）であると定義する．（被覆が一致する場合も含める．）一方，各語について適用可能なものごとをその語の外延と呼ぶならば，上の表１において，語Ｃの外延は｛ニ，

ホ，ト}であり，語Dのそれは{ニ，ホ，ヘ}であるから，外延の広狭の関係としては語Cと語Dの間に包含関係が成立していない．

次に語の否定を次のように定義する．便宜上語Cの場合を例として取り上げる．語Cの否定（nonC）のcoveringを，Cのcovering{A, B, D, E}の補集合―語群全体から語A, B, D, Eを除いた集合―の要素（いまの場合C）が適用される対象{ニ，ホ，ト}の被覆と定義する．（厳密に言えば，ここで定義しようとしているのはnonCそのものではなく，Cのcoveringから決まる集合であり，それを“nonCのcovering”と呼ぶわけである．）するとnonCのcoveringは表1により{A, B, C, D}であり，これは語Eのcoveringと一致する．つまり，語Cと語Eは，語Eのアポーハ論的意味がnonCのアポーハ論的意味に他ならないという意味で対立関係にある．ちなみに，語A, B, C, D, Eすべてについて，それぞれの否定のアポーハ論的意味（covering）を求めると，順に{A, B, C, D, E}, {A, B, C, E}, {A, B, C, D}, {A, B, C, D}, {A, B, E}となる．ここで，nonAのcoveringは{A, B, C, D, E}すなわち語群全体である（nonAは空名辞と呼ぶに相応しい）．nonBはA, B, C, D, Eのいずれにも（アポーハ論的意味は）一致しない．またnonC = E, nonD = E, nonE = Dとなる．なお，nonC = Eであるから語Cの二重否定nonnonCはnonEに等しいが，nonE = Dであるから，nonnonC = D ≠ Cとなって，nonnonC = Cは成立しない．（一方，nonD = E, nonE = Dであるから，nonnonD = nonE = Dとなる．）このように，一般に二重否定除去は成立しない[3)]．

3．「いき」の構造のアポーハ論的分析

最初に，「いき」の直六面体の上面（異性的特殊性の平面）のみを取り上げる．

先ず次のような語群（表2）と，そこから得られるcoverimg（表3）を考える．

	A	B	C	D
意気	○	×	×	×
渋味	×	○	×	×
野暮	×	×	○	×
甘味	×	×	×	○

表2

語（名辞）のcovering	否定名辞のcovering
意気{渋味，野暮，甘味}	{意気}
渋味{意気，野暮，甘味}	{渋味}
野暮{意気，渋味，甘味}	{野暮}
甘味{意気，渋味，野暮}	{甘味}

表3

表2は次のことを意味する．語「意気」は頂点A（意気）について適用され，他の頂点については適用を禁止される．「渋味」は頂点B（渋味）について適用され，他の頂点については適用を禁止される．「野暮」「甘味」についても同様である．

しかし，表3によれば，「意気」と「野暮」の対立が他に比べて「顕著」であるとは言えない．たとえば，non意気のcoveringは{意気}であるが，それは渋味，野暮，甘味それぞれのcoveringに含まれ，従ってnon意気はそれらの上位語とな

るが，渋味･甘味と比べて野暮に対して特別の位置にあるわけではない．そこで，頂点間に中間点を追加して，それらの点についても適用の可否を考えてみる．

	A	ab	B	bc	C	cd	D	da
意気	○	○	×	×	×	×	×	○
渋味	×	○	○	○	×	×	×	×
野暮	×	×	×	○	○	○	×	×
甘味	×	×	×	×	×	○	○	○

表4

この語群は，新たに追加した中間点（ab, bc 等）についてその両端の語の適用が適正と認められていることを表している．表4の場合,「意気」「渋味」「野暮」「甘味」の covering は，表2の場合と同じく，順に{渋味，野暮，甘味}，{意気，野暮，甘味}，{意気，渋味，甘味}，{意気，渋味，野暮}である．しかし，表2と異なり，アポーハ論的意味に関して次の関係が成立する．

意気＝non 野暮（意気の covering＝non 野暮の covering＝{渋味，野暮，甘味}）

渋味＝non 甘味（渋味の covering＝non 甘味の covering＝{意気，野暮，甘味}）

野暮＝non 意気（野暮の covering＝non 意気の covering＝{意気，渋味，甘味}）

甘味＝non 渋味（甘味の covering＝non 渋味の covering＝{意気，渋味，野暮}）

つまり，対角線上で相対する頂点に適用される語について，そのアポーハ論的意味が互いに否定の関係にある．その意味で，「意気」と「野暮」の対立[4]，および「甘味」と「渋味」の対立が「最も顕著」である．

なお，語（名辞）の外延（集合）を語の意味とするとき否定名辞（不～）の意味を当該の語の外延（集合）の補集合とするのが一般的である．しかし，この方法では，例えば，野暮＝不意気なる関係は得られない．実際，表4で,「不意気」の外延は {B, bc, C, cd, D} となり,「野暮」の外延 {bc, C, cd} に一致しない．

このように，語群のアポーハ論的意味を構成することによって，九鬼の描く趣味の直六面体の上面（正方形）について，その4つの頂点に関連する「対立」を示すことが可能であるが，では8つの頂点を有する直六面体における「対立」についてはどうであろうか．

まず，上面だけの場合，求めるべき「対立」は次の方法で得られた．

1．頂点と頂点の間（正方形の辺）に中間点を追加する．

2．中間点について，それを挟む両端の語の適用は適正と認められる．

この方針に沿えば，直六面体について次の語群表が得られる（頂点および中間点をアルファベット一字で表す）．

	上面								下面								側面			
	A	e	B	f	C	g	D	h	I	m	J	n	K	o	L	p	q	r	s	t
意気	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
渋味	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
野暮	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
甘味	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
上品	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×
地味	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×
下品	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×
派手	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○

表5

表5の語群の場合，表4の場合と異なり，対角線上の二語がアポーハ論的意味が互いに否定関係にある，といった対立は生じない．しかし，次のことが成り立つ．

どの語も対角線上で向かい合う語の否定（否定名辞）の下位語になる．

例えば，意気は non 野暮，non 地味，non 下品，non 派手の下位語である（図2の点線）．同様に，野暮は non 意気，non 上品，non 地味，non 派手の下位語である．下位語はその上位語の特殊であると考えられるから，意気は non 野暮の特殊，そして野暮は non 意気の特殊という形で意気と野暮の対立関係が存在する．

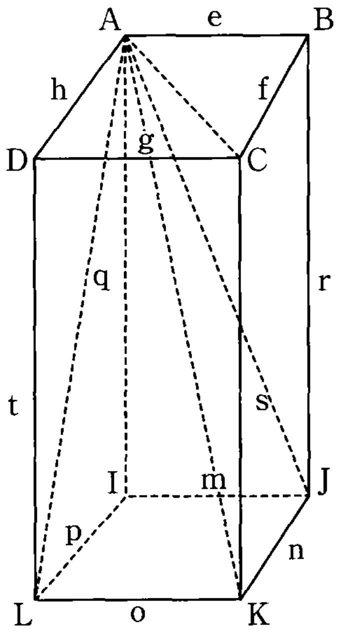


図2

A: 意気　B: 渋味　C: 野暮　D: 甘味

I: 上品　J: 地味　K: 下品　L: 派手

e: AとBの中間点　f: BとCの中間点

g: CとDの中間点　h: DとAの中間点

m: IとJの中間点　n: JとKの中間点

o: KとLの中間点　p: LとIの中間点

q: AとIの中間点　r: BとJの中間点

s: CとKの中間点　t: DとLの中間点

4．アポーハ論的対立について

前節で見たように，アポーハ論的対立は次の二通りである．1）互いに一方の語が他方の否定（否定名辞）の下位語になる（aph1）[5]，2）互いに他方の否定（否定名辞）の（アポーハ論的）意味に一致する（aph2）．ここで，対立 aph2 は対立 aph1 の特殊な場合と言える．

さて，表5の語群は図1のためには大きな欠陥がある．なぜなら図1の六面体

は縦方向に長いが，表5にはそのことが全く反映されていないからである．（表5はむしろ立方体の場合に相応しい.）そこで我々は，表5における4つの点 q, r, s, t を削除した語群を考える．この新たな語群 G においては次の関係が得られる．

上面／下面の各語は下面／上面の各語の否定（否定名辞）および上面／下面の対角線上で向かい合う語の否定（否定名辞）の下位語になる．

たとえば，意気は non 上品，non 地味，non 下品，non 派手，および non 野暮の下位語となる．同様のことが各頂点の語について成り立つ．ここに現れるアポーハ論的対立は上記の aph1 である．

ここで，語 X, Y の covering が与えられたとき，複合語 XorY の covering を次のように定義する．

XorY の covering = X の covering ∩ Y の covering（積集合）

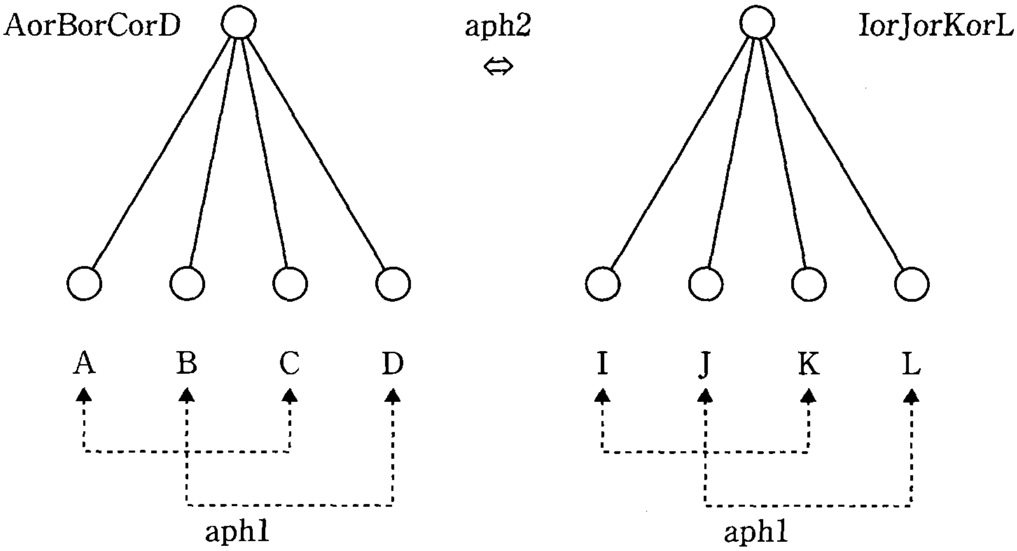
すると，語群 G において次の関係が成り立つ．（詳細は省略）

AorBorCorD = non（IorJorKorL）; IorJorKorL = non（AorBorCorD）

AorBorCorD が上面を，IorJorKorL が下面を表すと考えれば，この関係は上面と下面のアポーハ論的対立が aph2 として現れることを意味している．そして，それぞれの面における対角線上で向かい合う語のアポーハ論的対立は aph1 である（下図：実線は語の下位語・上位語関係を示す．例えば，A は AorBorCorD の下位語である）．

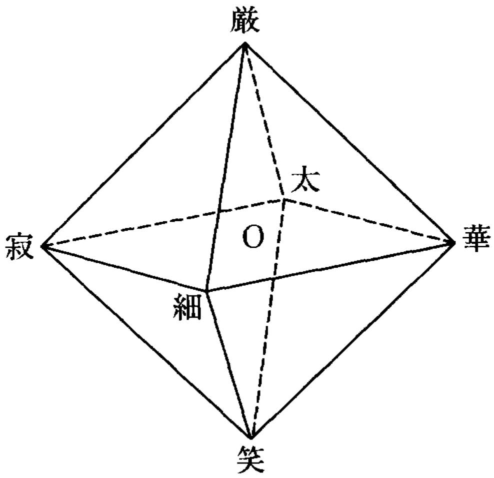
図と類似の対立構造は，語の外延（集合）の包含関係に基づいても得られる．aph1 に代わって「外延（集合）の交わりが空集合」(ext1)，aph2 に代わって「一方の語の外延が他方の語の補集合」(ext2) という外延的対立をとればよい．

しかし，このことはアポーハ論的否定が無用であることを意味しない．なぜなら，表4に関連して述べたように，補集合概念，言い換えれば外延的対立 ext2 は「いき」の構造の対立の意味としては必ずしも有効ではないからである．また，表4の場合や次に挙げる「風流正八面体」の場合に現れる外延的対立は ext1 であるが，そこに現れるアポーハ論的対立は aph2 である．つまり，二種のアポーハ論的対立の出現の仕方は，二種の外延的対立の出現の仕方と常に平行関係にあるというわけではない．すなわち，「aph1 の現れるところには ext1 が常に現れ，かつ，aph2 の現れるところには ext2 が常に現れる」というわけではない．



九鬼は「風流に関する一考察」で次の「風流正八面体」を描いている（p.118）．

これについても先と同様の方針により，辺（稜）を挟む2頂点の中間点を追加し，その中間点についてはそれを挟む頂点の語は適用が許されるとすると，次の結果が得られる．



厳＝non 笑，笑＝non 厳

寂＝non 華，華＝non 寂

細＝non 太，太＝non 細

つまり，「対角線上で向かい合う頂点の語どうしが互いにアポーハ論的否定の関係にある.」すなわち，対立 aph2 が現れる[6]．（外延的対立としては ext1 が現れる.）

最後に，アポーハ論的対立と外延的対立の比較を行っておきたい（詳細は別稿を期す）．次の事が成り立つ．（語群表一般で，語 A, B について△が出現しないとする.）

Ⅰ．A と B の外延的対立 ext1 とアポーハ論的対立 aph1 は同等である．

Ⅱ．A にとって B が唯一の外延的対立者であるか，あるいは A の対立者 B の外延が他の A の対立者の外延を全て含むとき，一言い換えれば，A にとって B が外延的に最大の対立者であるとき一そしてそのときに限って，アポーハ論的意味で B＝nonA である．

いま，X でないものを「非 X」と名づけるとき，「非 X」の指示対象は一般的には一意的には決まらない．例えば「非青」といっても，それが赤なのか黄なのかは不定である．その点で「非青」は「もの」というよりは，指示対象が「青で

ない色」に制限された変数（変項）─制約変項（restricted-variable）─と考えられる.（表2で,「非意気」は渋味, 野暮, 甘味のいずれでもあり得る.）非Xのうち X と外延的対立 ext1 をなすものについては, Ⅰ. により, これはアポーハ論的対立 aph1 で表せる.「風流正八面体」の場合は, 語「厳」と語「笑」について, 互いに一方が他方の唯一の外延的対立者であり, Ⅱ. により,「厳」と「笑」はアポーハ論的対立 aph2 を形作る.

九鬼の描く三次元的多面体構造を我々のアポーハ論的分析で尽くすことはできない. しかし, ここに論じたようなアポーハ論的構造は, いわば「いき」の構造の縁取りと見ることができるであろう.

1）九鬼周造『「いき」の構造』岩波文庫 1979, p.44（単行本, 岩波 1930）. 引用は全て文庫版.

2）文献を介した議論は拙著『ディグナーガ, 論理学とアポーハ論』山喜房 2001 に譲る.

3）語群表一般において, 語の集合をω, 対象の集合を S とするとき, それぞれのベキ集合（すべての部分集合を要素とする集合）を P（ω）および P（S）として, P（ω）から P（S）への関数 h, および P（S）から P（ω）への関数 g を次のように定義する.
　h（x）: $\bigcup_{Z\in x}$ M（Z）. ここで, M（Z）は語 Z が適用できる対象の集合（Z の外延).
　g（a）: a $\in$ P（S）について, h（x）$\cap$ a $= \phi$ となる最大の x $\in$ P（ω）.
　実のところ, 本節におけるアポーハ論的否定（non）は P（ω）から P（ω）への関数 gh を用いて表すことができる. 従って, 本稿で定義する限りのアポーハ論的否定の（論理学的）解明は関数 gh の性質の解明に帰着する. 詳細は別稿を期したい.

4）九鬼は次のように記している.「意気といい粋といい, いずれも肯定的にいい表わされている. それに反して野暮は同義語として, 否定的に言表された不意気と不粋とを有する. 我々はこれによって「いき」が原本的で, ついで野暮がその反対意味として発生したことを知り得る」(pp.38-39). ここで,「不意気」「不粋」は我々の「non 意気」に相当するが, 我々は「non 野暮」なる語も想定するものであり,「野暮」に対して「いき」が原本的であるといった論点を扱うことはできない.

5）語 A, B について, A が nonB の下位語ならば, B は nonA の下位語になる（証明略).

6）九鬼は「風流の産む美的価値の本質的構造は三組の対立関係に還元される」(p.112) と述べている. ここで, 三組とは華・寂, 太・細, 厳・笑の三組である.

〈キーワード〉 九鬼周造, ディグナーガ, 否定

（目白大学教授）